

## 集合的シンボルによる政治的介入 理論的出発点、方法論的プロセスと分析例

### Mit Kollektivsymbolen Politisch Intervenieren. Theoretische Ausgangspunkte, Methodisches Vorgehen, Exemplarische Analysen

ロルフ パール

PARR, Rolf

猪刈 由紀 訳

IKARI, Yuki

#### 要旨

本稿では、間ディスクール分析により、まず集合的シンボル分析の理論的基礎をしめすが、その際、集合的シンボルとは誰もが理解でき、自ら用いることもできるようなものとして定義される。続いて、集合的シンボル分析の方法的プロセスを展開し、最後にグレッタ・トゥンベリのシンボル使用を例に、集合的シンボルによってどのように政治的介入がなされるのか明らかにする。

#### 1. 理論的枠組み：間ディスクール分析の理論

18世紀中葉以来の近現代社会とその文化は、特殊な知的領域においてそれぞれ独自の専門的ディスクールへと分化しただけではなく、それへの回答として、専門分化した諸領域のあいだにあらたな結びつきを再生するような発話形式をも形成したという認識から、間ディスクール理論とその分枝である集合的シンボル分析は生じた（Link / Link-Heer 1990 他）。間ディスクール理論の観点では、ディスクールを結ぶこうした要素とその手続きによって、様々な場で主題化された現代社会の社会的結束は架橋の総体として理解することができる。それは事実上高度に分化し専門化した社会的部分領域を、その全体性はつねに断片的、ばらばらでありつづけねばならないにしろ、「想像の上での生活全体」へと変容する。すると文化全体は、第一に、（自然科学、人文科学などの）特殊ディスクール、あるいは特殊ディスクール集団が、それをそれぞれに形成したということ、第二に、どのような布置ととりわけ階層のうちに文化全体が秩序立てられているかということ、第三に、ディスクールをつなぐ要素は、各文化それぞれに関する特殊なディスクールの境界を超えるいかなる橋を架けるの

か、ということに規定されることになる。

## 2. 集合的シンボルはなにをなすか

再統合のこうした機能を引き受けるのが、メタファー、比較、アレゴリー、そして誰もが理解し用いることのできるシンボルといった、特に類比を形成するプロセスである。例えば大都会ジャングルという発話は、「文化」と「自然」という社会的な部分領域を結び、ある政治家を「政府チームのトレーナー」と言うことは、「スポーツ」と「政治」を、「コロナウイルスの攻撃」と語ることは、「戦争」と「医療」とを結びつけている。これらすべての事例において私たちが扱っているのは形象性（ラテン語の *pictura*）であり、それは本来それにより指向され、意図されたもの（ラテン語の *subscriptio*）とは別のもの表している。集合的シンボルはこのように、あるひとつの社会的な部分領域を他の領域の構成的メディア（仲介物）となす。

このような集合的シンボルの重要な機能の一つは、高度に専門化した事実関係を一般に理解可能にすることである。これはメディアと政治においてなぜとりわけ頻繁に、文化的、社会的な「キット」として象徴的シンボルが用いられるのかを説明する。特に、複数の専門領域にまたがる知識に関する複雑な事実関係を、広く公衆に向けてコンパクトな場で短時間のうちに、しかし同時にできる限り端的に提示するために使われるのである。メディアの文脈では、ある討論やテーマに関する専門知識が全複雑性のなかで詳細に伝えられるだけの十分な時間（ラジオにおいて）、広い空間（新聞において）、また長い放送時間（テレビにおいて）があるわけではない。したがってテーマや議論に関係する多くの専門知識領域を簡潔に表現するような、日常の身近な具象、すなわち集合的シンボルが用いられるのである。

例として、ひとつの思考実験が役立つだろう。ある政治家が、すべてのアクチュアルな内政、外交上の問題を説明するために二分間の時間を与えられたとする。彼、あるいは彼女はこの状況にあってかなりの確率で、集合的シンボルを用いて高騰する防衛コスト、低下する税収、価格上昇と（関連するすべての統計、計算、予測とともに）高い社会的コストに象徴的な呼び名を与えることだろう。「われわれはベルトを締めなおさねばならない。（Parr 1998 参照）」

したがって集合的シンボルは、文学的な、また（映画やその他の視聴覚メディアを含む）ジャーナリスティックな文章においてのみならず、まさに政治的に介入するような発言や明言にもみられる。ドイツ再統一の際には「共同ドイツの家」を再建するのだったし、2008年の金融危機では、象徴的な「金融市場火災」が消火されたのだったし、政治家は最終的な金融制度の崩壊に抗する防壁を打ち立てた「消防士」となった。そしてコロナ大流行の始まり以来、ウイルスに対して、まさに「勝利」以外はなにも問題とはならないような、軍事的な意味合いの「闘い」が口にされるようになっていく。

メディア的政治的な公論空間に属そうとするものはまさに、－これらの数例がすでに示し

ている通り –、集合的シンボルを用いるよう強いられているようである。これはとりわけラジオ、テレビ、インターネット上での報道、新聞が、複合的な声明や、多岐にわたる政治的プログラム、長い演説のうちから、たいてい圧縮に適した集合的シンボルを選び引用しているという観察から証明される。

したがって、政治的に介入する発言や議論の少なくない部分が（例えば環境危機について）集合的シンボルによって縁どられているということは、驚くには値しない。そこではそうしたシンボル群と結びついた評価が、結束し、すなわち一致したディスクールのな、また政治的でもあるような立場を明確にすることを可能にする。そしてとりわけ、それにより集合的シンボルはその受容者を、特定の行動を容易に起こさせるような主体的状況に置く。というのも、だれが共同の家に住み、火事にさらされ、あるいは生死をかけた戦いに負けたいと思うだろうか。もし大統領がコロナウイルスを疑似軍事的に戦う敵として認識しているなら、自らを見えない敵と戦う戦時下大統領と呼ぶことは驚くことではない。

### 3. 集合的シンボルの定義基準

集合的シンボルが間ディスクール論的観点からみた専門ディスクールと専門領域の連結を表しているとするなら、意味論的な観点からすれば、それは複雑で画像的に動機づけられ、パラダイム的に拡張された徴を扱っていることになる。それらは以下のように定義される。

第一に、集合的シンボルとは、図像としての面 (Pictura) と本来の、図像によって意図されたもの (Subscriptio 図像に帰され、図像により描かれたもの・「意味」としての面とを統合している。それらはしたがって二項から成り立つ (語用については Link 1978; Drews/Gerhard/Link 1985; Becker/Gerhard/Link 1997)。

第二に、図像面は、それ自体がより長く複雑なテキスト／図像的相関をとぎれなく構成するような、おおくの部分的な像の組み合わせから成っている。統語論的にみれば、図像要素 pictura はそのつど一つの意味的要素 subscriptio に配分され (例えば「闘争／勝利」の図像要素は「戦争」の意味 subscriptio と)、ある集合的シンボルの図像面と描かれたもの subscriptio の面とは、パラダイム的には少なくとも原初的な同位体へと拡張している。この多項性が、集合的シンボルを古典的なメタファー (隠喩) から区別するのである。

第三に、図像とそれに帰された意味との関係は、より詳しく規定されうる。それは完全に恣意的なのではなく、意味論的に動機付けられている。たとえばゆっくりと沈んでいく風船の図像では、株式購入の広告シンボルとはなりえない。

第四に、集合的シンボルはアイコンたる指標を満たしている。つまり、図像的要素は具体的に表現される。それが集合的シンボルであるかどうかを試すひとつの単純なテストは、図像に対応するテキストが例えば風刺へと転用できるかどうかである。最後に五つ目の指標は、多義性への傾向、すなわち一つの絵のもとに様々な意味を形成しうる (ただし恣意的に

ではなく) という点である。

#### 4. 集合的シンボルシステム

集合的シンボルは個別現象ではない。むしろ全体として、互いに緊密に関係した、歴史的に変形され、共時的にはしかしおおいに安定し、それによってある文化において関連する議論と出来事がコード化されうるような、見解形式の内的に一貫したシステムを形成する。

システムがこのような性格を持つのは、集合的シンボルが図像の面でも、それに帰されたもの(意味)の面でも、パラダイムの同等級へむかう傾向をもち、それにより相互交換に適していることの結果である。ひとつには、様々な社会的部分領域の図像要素は、同じままである「意味」のもとに相互交換されうる。そうして、大都市は有機体として(頭、心臓、さまざまな肢体、血管などをもつ)、時に昆虫のひしめきとして、あるいはまた複合機械として表現され、しかしまた、非常な蒸気のもとにあるボイラーとしても言い表される。そこから互いに代替可能な絵が(図象の鎖)同じ意味のままで(subscriptio)生じる。例えば、東京は日本の金融資本の心臓である、とは、東京が「そこで歯車が互いにかみ合う、完璧にうごく資本機械のモーター、日本経済のつねに成長し続ける中心的有機体だ」ということである。恐ろしい大都市という、その中心において同じ意味のままであって、互いに代替可能な図像的要素のもうひとつの連鎖の例としては、例えば、怪物クラーク、モロク神、ジャングル、密林、迷路などがあげられる。

これが集合的シンボルの連鎖の最初の局面であるならば、逆に様々な事実が一つの像のもとに潜在させられる第二の局面がそれに加わる。すなわち同一の図像(pictura)が、例えば、経済先進国のエコロジックのバランスシートにおける失敗の多様な事実(subscriptiones)を表しうる。「短期間に過剰な二酸化炭素」、「わずかな台数の電気自動車」「家屋の密閉性の不足」など。連鎖のこれらの局面は、一つの図のもとでの様々な描かれたもの(subscriptiones)の融通、スライディングにかかわっているのである。

第一に同一でありつづける意味のもとでの図像 Bilder の連鎖、第二に異なる絵 Bilder によるひとつの図 pictura の実現という、この二つの構造的局面から、共時的なシステムとしての集合的シンボルの性格が生じる。西ヨーロッパでは、様々な個々の約100から150におよぶ関連するシンボルから成り立つような(それらのうちにはとりわけ、乗り物、構造物、あるいは身体シンボルが含まれる)共時的なシステムであり、交換可能性によって緊密に結ばれた二つの局面によって、互いに組み合わさっている。集合的シンボルのこのシステムは、メディア的政治的ディスコースでのあらゆる種類の出来事をコード化するためにいつも繰り返し用いられる。

## 5. 集合的シンボルの分析

集合的シンボルは、二本立ての図式を用いると非常に簡単に分析できる。最初の工程では、ひとまずテキストの中に見つけられる図像と意味要素を持つすべてをリストアップし、次にテキストの中、あるいはテキスト集積のなかのそれらをいったん明示化、すなわち実際にテキスト中における要素を表示する。この最初の工程の結果においてはふつう、図像的面でも意味的面でも、空白ができる。第二の工程ではこの空白を埋める必要がある。すなわち、図像的要素と意味的要素において空白を埋めるのだが、その際、意味が形成されるかどうかは、既存の要素が示す。ここには（意味的な）余地、遊びがあるが（定義指標5 多義性）、そうはいつでも全シンボルが許すかどうかの制限のうちでのことである。この穴埋め工程は、図像から意味の方向へも、またその逆の向きにも起こりうる。

図像の側のみで展開し意味への参照を持たないテキストというものは、まれにしかありえない。その結果は、集合的シンボルの（あるいは多くの互いに結びついたシンボルの）特殊な使用を理解可能にする。これをもっともよく示すのは具体的な例で、ここではドイツの週刊誌「ディー・ツァイト」の、アメリカ社会は分断されているのかについての記事を引く。まずこう始まる。

アメリカ合衆国にウイルスが侵入したとき、ウイルスはすでに重い病の兆候を示していた国を前にして、それを容赦なく利用した。慢性の苦しみ – 腐敗した政治的階級、硬直化した官僚制、無慈悲な経済、分断され、注意を逸らされている住民 – は長年にわたり治療を受けては来なかった。それらがいかに重症であったかは、大流行の経験を経てようやく明らかになった。我々アメリカ国民が重度の危険にあるハイリスク集団であるとの認識は、我々を激しく動揺させた。(Packer 2020, 2)

図像要素と意味要素の二柱の図式として、ここで用いられた病気のシンボルは以下のように整理できる（テキスト中では明示されていない要素はカギかっこ内）。

|     | Pictura                             |     | Subscriptio   |
|-----|-------------------------------------|-----|---|
| p 1 | 重度の病歴<br>schwere<br>Vorerkrankungen | s 1 | [すでに長く知られたアメリカ社会の問題]  |
| p 2 | 慢性の苦しみ<br>chronische Leiden         | s 2 | a: 腐敗した政治階級<br>b: 硬直化した官僚制<br>c: 無慈悲な経済<br>d: 分断され、注意を逸らされた住民 |

|     | Pictura        |     | Subscriptio                           |
|-----|----------------|-----|---------------------------------------|
| p 3 | 長年治療されてい<br>ない | s 3 | 社会問題は無視されてきた                          |
| p 4 | [重症の] [苦しみ]    | s 4 | [社会秩序を揺るがす苦しみ]                        |
| p 5 | ハイリスク集団        | s 5 | a: [ことのほか危機に瀕した社会]<br>b: [崩壊の危機にある社会] |

こうした分析を個々のテキストについてだけでなく幅広いテキスト群を対象におこなうことで、繰り返されるシンボル使用についての明言がされる。どのシンボルが同一の事実について、またその逆に、どういった異なる事実が同一のシンボル使用によって互いに結びつけられてもちいられるのか、そして – しばしば少なくとも同じくらい興味深いことには – どういった事実はそうでないのかについての明言である。

ある具体的な議論や政治的対立でシンボルの連鎖が関与したプラスかマイナスの評価を補足的に見るなら、その時々に取りられたディスкурールの立場についての明言がなされる。すなわち、そこで取られる立場は、すでにあるものを確認するのか？ それへの代替案は作られるのか？ あるいはその集合的シンボルについて産出された立場は、干渉すら表現するのか？ こうしたディスкурールの立場についての知識は、ディスкурールの戦略を考察するための前提である。どのシンボルがどの – 例えば、文化的な、あるいは政治的な – 関連において、どの目的に対して有意義に用いられうるか？ 成功裏に広く一般に用いられるシンボル、しかし独自のディスкурールの立場に合致しないシンボルについての最善の反応はどういうものか？ だれがそうしたシンボルによってどのディスкурールの立場を代表するのかを問うならば、最終的に担い手についての明言もなされることになる。そしてなによりも、集合的シンボルによって呼び起こされる反応において、どのシンボルが政治的介入やそれと結びついた価値評価的立場に殊に適しているのかを見ることができる。

## 6. グレタ・トゥンベリと「燃えている家」の集合的シンボル

集合的シンボルを用いた政治的介入の一つの良い例は、スウェーデンの環境活動家グレタ・トゥンベリの談話である。およそ2018年からのトゥンベリによる発言を時系列的に振り返ると、あれこれのレトリック要素が見られるものの、集合的シンボルはまずは用いられてはいないということに気づく。これが変わるのは2019年1月25日、ダボスで開かれた第49回世界経済フォーラムでのことである。燃える家のシンボルではじまり、講演の全体を我々は12時5分前の状況にあるという危機のシナリオに結び付けている。これはよく行われることだ、というのも危機的シナリオとそうした状況での行動の可能性は、集合的シン

ボルとさまざまに結びついているからである (vgl. Parr 2013b)。この講演は確かにこれまで最も頻繁に引用され、そしてそのことは、この講演がとりわけ意味に富み、集合的シンボルを用いた表現で、特にメディアの注目を引き付け、そうして代表的な政治的立場をも引き寄せることができたことを証している。

燃えている家という集合的シンボルは、本来は二つのたがいに関連するシンボル、すなわち火事と家であり、この二つを最も緊密な空間でそこからみちびきうる主体的状況に結び付けて、トゥンベリは世界経済フォーラムの講演を始めている。

私たちの家は燃えている。

わたしは、私たちの家が燃えていると言うためにここにいます。

気候評議会によれば、12年しないうちに、間違いをもちや訂正できなくなる事態に至る時点にいます。この猶予の間に例外なく社会のすべての方面で変化が生じなければなりません。そこには二酸化炭素排出量の少なくとも50パーセント削減することも含まれます。(Thunberg 2019c, 43)(1)

これは気候政策的な介入として、多くの理由と多くの次元で、大変巧みになされたものだった。集合的シンボルの次元では、燃えている家、という図像は具体的であると同時に十分に抽象的でもある。様々な異なるシンボリックな家を含むことができ、それはヨーロッパの家、アメリカの家、あるいは全世界の家や、単純にもっとも二酸化炭素を排出する国々も指しうるのである。それによりトゥンベリは自分の聴衆に、意味の側での図像の具体化を任せている。第三の、いくらか長いパッセージは、12時5分まえの危機シナリオで、そこで燃えている家のシンボルと、それにより自分の家が燃えているのを目にするという、人を落ち着かなくさせる主体的状況を展開している。講演の最後になってようやくトゥンベリはシンボルと主体的状況を再び取り上げるが、しかし修辭的に巧みなことに逆の順番で行われ、まず逆の徴、すなわち聴衆に受け入れられている間違っただ反応と、それと結びついた間違っただ主体的状況を非難して、聴衆たちはれとは異なる状況へ、すなわち差し迫る気候大災害という危機的シナリオへと身を置き換えられて、そして最後にこれらすべてがもう一度、燃えている家のシンボルと組み合わされ、図像と主体的状況は緊密にひとつの端的な文に要約される。

大人はいつも言う。わたしたちは若いひとたちにたいして、希望を抱かせる責任を負っていると。でも、わたしには大人たちの希望などいらない。大人たちが希望に満ちていることなど望まない。私が望むのは、あなたたち大人がパニックに陥ること。わたしは、大人たちが日々わたしが感じているのと同じ不安を抱えることを望み、あなたがた大人たちが行動することを望む。わたしは、あなたたちが危機にあることを望んでいる。わたしは、あなたたちが自分の家が燃えているときに行動することを望む。だって実際にそれが起こっているのだから。(Thunberg 2019c, 48)(2)

集合的シンボルと主体的状況はここではクライマックスとして構想されている。それは気候政策のかじ取りのひっ迫を強調し、共に住む家であるこの星を救うために、政治とすべての人が直ちに行動することを求めている (Greve 2019, 116)。さらに別の機会には、トゥンベリはシンボルと主体的状況の組み合わせを強調している。フェイスブックの2019年2月2日の投稿で、「大人がパニックに陥っていることをわたしは望むというとき、わたしが意図しているのは、

わたしたちが危機を危機として扱わねばならない、ということです。あなたたちの家が燃えているとき、あなたたちは腰かけたまま、火が消えたあと家を再建できればどんなにいいだろうなどと語り合っているでしょうか。あなたたちの家が燃えているとき、あなたたちは駆け出して皆が外にいるかと心配し、消防士を呼ぶでしょう。ある種のパニックが求められるのです。(Thunberg 2019c, 54)(3)

トゥンベリがここでしていることは、自分のフェイスブックのフォロワーを前に、まるで舞台の上のように、自らを通じて広まった集合的シンボルを解釈することに他ならない。そしてそこで、シンボルに結びつけられた意味 *subscriptio* と、彼女が聴衆をそこに置きたいと考える主体的状況をさらに明確化しているのである。

家が燃えている。人はパニックに陥り、自分を救うべく行動する。家を救おうとするのである。例えば消火のために消防士を呼ぶ。これらすべては気候危機に関連づけられ、この星は文字通り燃えているのであり、私たちは滅亡を前にしているのだから、パニックはまさにそれにふさわしいのだと、トゥンベリは強調する。なるべく早く対応することが必要な主体的状況なのである。トゥンベリは、まずは集合的シンボルを用いて、アピール力を最大化することを目指す、最終的には「燃えている家」の講演の「単なる」象徴としての性格を否定する。(Greve 2019, 116)

これに続く講演で (2019年4月16日、シュトラスブールのヨーロッパ議会)、トゥンベリは基本となる「燃えている自分の家」のシンボルを離れ、第一に個々の図像要素をつけ加え、そうすることでシンボル性を拡大した。(焼け落ちる家 [Thunberg 2019d])。第二に、そこに聴衆が置こうとする主体的状況をさらに先鋭化し、第三に、あたらしいシンボルが付け加えられた(「砂上の楼閣」、「分かれ道」 [Thunberg 2019d], [Thunberg 2019c, 64])、そして第四に、短い証例として現時点でのアクチュアルな火災の例が挙げられる。パリのノートルダム寺院と南米の森林火災である。これは2020年夏のカリフォルニアでの山火事のような生じつつある事態を、地球という燃えている家のシンボルのもとに包摂している。

グレタ・トゥンベリは – こうまとめることができよう – 集合的シンボル「燃えている私たちの家」を数週間で気候危機の議論のうちに確固として確立し、その際には彼女自身の独自のディスクール的、政治的な立場を強化し、多数の人々に – もはや若い人々にだけむけたで



はない – 逸話向けの魅力的なディスクールのインターフェイスを用意して見せたのだった。

これがいかに有効であったか、また依然として有効であるかを示すのは、印刷メディア、ウェブ、ツイッターやフェイスブックそのほかの多くのソーシャルメディアでのすでに非常に広範にわたる受容である。そこではこのシンボル性が取り上げられ、創造的に手が加えられ、言語メディアを超えて強められ、風刺画、バナー、プラカード、コラージュなどの図像的な形でも再生産された (vgl. dazu Greve 2019)。これが可能になるのは集合的シンボルの図像的性格によっている。多くの場合、とても簡単に図像的に表現でき、そのためメディアを横断する可能性の基盤をつねに持っているからである。

集合的シンボルと結びつきうるのは、正真正銘の図像 (アイコン) へと固定し定着しうるような特徴的絵図である。したがって例えば、風刺画や印刷メディアの表紙上での、顕著に視覚的なグレタ・トゥンベリの登場は、彼女の丸い頭が地球として描かれるといったかたちで、集合的シンボル「私たちの家は燃えている」との組み合わせに見られるのである (例えばヴェルト紙 2019 年 12 月 9 日掲載のオリヴァー・ショーフによる風刺画を参照)。(4)

## 7. まとめ

集合的シンボルとはこのように、公的・政治的発言とコミュニケーションのひとつの重要な要素である。これを用いて介入し、政治的立場を成功裏に代表し、またそれを宣伝しようとするものは、集合的シンボル機能の有り様と可能性とに十分に通じていることが望まれるのである。

## 注

- 1) 英語原文: »Our house is on fire, I am here to say our house is on fire. According to the IPCC we are less than 12 years away from not being able to undo our mistakes.«. (Thunberg 2019a).
- 2) 英語原文: »Adults keep saying we owe it to the young people to give them hope. But I don't want your hope, I don't want you to be hopeful. I want you to panic, I want you to feel the fear I feel every day. And then I want you to act, I want you to act as if you would in a crisis. I want you to act as if the house was on fire, because it is.«. (Thunberg 2019a)
- 3) 英語原文 »And when I say that I want you to panic I mean that we need the crisis as a crisis. When your house is on fire you don't sit down and talk about how nice you can rebuild it once you put out the fire. If your house is on fire you run outside and make sure that everyone is out while you call the fire department. That requires some level of panic.«. (Thunberg 2019b)
- 4) 次の文献もごらんください: »Planet Erde mit Greta-farmen, die Welt braucht junge Klimaaktivisten. Vector Illustration«. <https://www.canstockphoto.at/planet-erde-m%C3%A4dels-z%C3%B6pfe-70611947.html>.

[ロルフ パール / Duisburg-Essen 大学教授 / ドイツ文学、メディア論]

[訳者：いかり ゆき / 上智大学、東洋大学、聖徳大学非常勤講師 / ドイツ・ヨーロッパ中近世史]